

本阿弥光悦と母妙秀

池松 孝子

日本を代表する江戸初期の芸術家、本阿弥光悦。工芸家、書家、陶芸家、作庭師など数えきれない顔を持つ。

光悦の生家は足利尊氏の時代から刀剣の鑑定、目利き、砥ぎを本業とする京の上層町衆。刀剣を扱うには鞆、鏝、それに付随する木工から漆工、金工、蒔絵、螺鈿などあらゆる工芸知識が必要だ。家康や前田利家からもその目利きは「天下第一」と称賛された。光悦が依屋宗達、尾形光琳らと琳派の創始者として後世、日本文化に与えた影響は計り知れない。「八橋図蒔絵螺鈿硯箱」「燕子花図屏風」など琳派の国宝は広く知られるところだ。

光悦が四十代で運命の出会いをしたのが依屋宗達である。天才と天才の合作である重要な文化財「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」が生まれた。宗達の鶴の下絵に、徳川家光に「天下の重宝」と言わせた書の達人、光悦が三十六歌仙を書いた。十五日に渡り大小無数の鶴が様々に位置を変えて飛ぶ。ここに書と絵画のコラボが生まれた。

この本阿弥光悦を育てたのが母、妙秀だ。『本阿弥行状記』には、本阿弥一族の逸話が記されている。「身の貧なることは苦しからず富貴なる人は慳貪にて有徳に成つるやと心もとなし」「金銀を宝と好むべからず」という。身の周りを能う限り簡素にして心の豊かさを樂しむべきと。妙秀は子供の育て方を「少しでも良きことあれば殊の外悦び褒めり」と「親子兄弟近くに住居するはよしからぬこと也。遠きは花の香と云う」など、才気あふれる名家をよく治めた妙秀の言葉だ。また夫の光二が信長の不興をかけた折には、信長の馬に取りすがり鐙で蹴りつけられながら無実を訴えた。

かつてブームにもなった中野孝次の『清貧の思想』に詳しい。無私の生き方を貫く偉大な妙秀に育てられた光悦は、晩年は使用人一人、飯炊き一人の質素な暮らした。日本人の源流にある強靱な精神世界だと思う。

私の尊敬する恩師の繰り返す言葉は「無一物中無尽蔵」であった。